

令和4年度経済学部学生チャレンジプロジェクト事業成果報告書

私だけの坂出を撮りミング

代表 川渕 瑞葵（経済学科 2年生）

（1）目的と概要

本プロジェクトでは、香川県坂出市の地域活性化のため、約2か月半の間、インスタグラムにおいて坂出市内で撮影した写真を対象に募集してフォトコンテストを開催した。坂出に関わる人々がフォトコンテストを通じて坂出の魅力を発見する機会を創出し、プロジェクトメンバー自身も坂出の新たな一面を知ること、また、インスタグラムの投稿でフォトコンテストを行うことで、坂出のことを知らない人にも坂出を知ってもらうことを目的として実施した。新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、非接触型で開催可能なフォトコンテストでの地域活性化を試みた。フォトコンテスト開催期間終了後は、メンバーで設けた部門ごとの優秀賞を選び、優秀賞とその他応募作品の写真をまとめた写真集を作成した。作成した写真集は、私たちの活動拠点であり、瀬戸大橋記念館展望談話室で運営している Hashicafe にて配布を行う予定である

（2）実施期間

令和4年6月10日から令和5年3月31日まで

（3）成果の内容

1) このプロジェクトの具体的な成果

フォトコンテストを開催するにあたり、SNS とチラシ配布で広報活動を行った。SNS ではフォトコンテストの募集部門である「瀬戸大橋部門」「食べ物部門」「夜景部門」「ひと部門」にちなんだ写真をプロジェクトメンバーで投稿し、フォトコンテストを周知するとともに、どのような募集部門があるかを一目で分かってもらえる投稿にした。また、SNS で私たちの投稿がより多くの人の目に留まるために、SNS 投稿件数が多いハッシュタグ（例：「#香川」「#瀬戸大橋」）や、写真や旅行に関連するハッシュタグをつけて投稿し、さかいで沙弥島プロジェクトを知らない人にもフォトコンテストの存在が届くような工夫を行った。チラシについては、300部作成し、主に当プロジェクトが瀬戸大橋記念館展望談話室で運営する Hashicafe の来客者に配布した。フォトコンテスト開催期間中に瀬戸大橋記念公園でイベントが開催された際にも配布し、宣伝を行った。また、坂出市内の写真部がある高校（坂出高校、坂出第一高校）に電話で都合を合わせた上で、写真部顧問の先生にチラシを手渡しした。坂出商業高校については写真部顧問の先生と予定が合わなかったため、代理の先生に手渡しした。

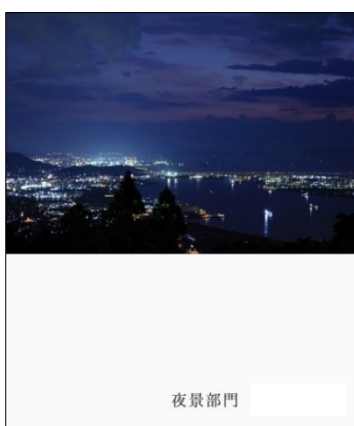
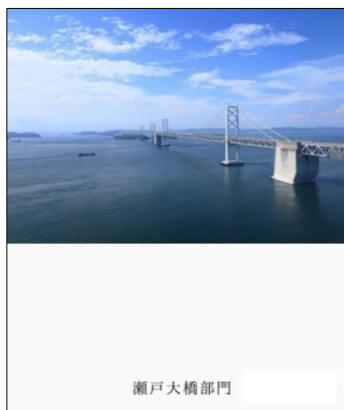


←作成したチラシ



←実際の SNS 投稿

9月14日からフォトコンテストを開始し、11月30日まで写真の募集を行なった。「#カシャッとさかいで2022」のハッシュタグをつけて写真を投稿するか、ダイレクトメッセージ機能で当プロジェクトのアカウントに直接写真を送るかの2種類の方法で募集を行なった。応募写真総数は約300枚であった。応募写真を4部門（瀬戸大橋部門、食べ物部門、夜景部門、ひと部門）に振り分け、それぞれの部門の優秀賞と、すべての写真の中から最優秀賞を選出した。



↑ 写真集のなかで紹介した最優秀賞と部門優秀賞の作品

応募作品の写真を用いて写真集を200部作成した。写真集はHashicafeで配布する予定である。写真集として作品を形に残し、配布することでより多くの人に坂出の魅力を知ってもらうことができると考える。また、2月25日から3月26日の間、最優秀賞と部門優秀賞の5作品を額縁に入れて、瀬戸大橋記念館展望談話室に展示する。さらに5作品の受賞者にはHashicafeで使用可能な無料券を配布した。

2) このプロジェクトが大学や地域社会の活性化、学業の振興等に対してもたらした影響
あるいは効果

先にも述べた通り、このプロジェクトは坂出の魅力を発見してもらうことを目的として実施した。このプロジェクトを通じて参加者に坂出の魅力を感じていただけたと考える。そのように実感したのは参加者から寄せられた声である。『この写真を見た人たちが「こんなに子どもが笑顔になるなら、私たちも坂出で子育てしたい!」とかなんとか思ってもらえるよう願っています』『今年の夏にうどんが食べたくて香川に行ったのですが、一番思い出に残ったのはふらっと立ち寄った瀬戸大橋記念館でした。瀬戸大橋を作る苦勞、瀬戸大橋ができたときのみなさんの喜びが伝わり、瀬戸大橋が大好きになりました』。SNSで

実際にこのようなメッセージをいただき、参加者が坂出に愛着を持たれたことが地域社会への貢献に繋がったと考える。また、フォトコンテストの参加者が Hashicafe へ来店して下さった。フォトコンテストがさかいで沙弥島プロジェクトの存在を知っていただけるきっかけとなり、活動が広まったことはプロジェクトメンバーのモチベーションにも繋がった。さらに瀬戸大橋記念館の展望談話室にフォトコンテストの優秀作品を展示したことで SNS 世代以外の方からも興味を持っていただけた。実際に「素敵な場所」「この写真の場所へ行ってみよう」と声をかけていただき、フォトコンテスト参加者以外にも坂出の魅力を発信できているのではないかと考える。私たちメンバーへの影響として坂出の新たな魅力を発見できたことが挙げられる。フォトコンテストの作品を見て初めて知った場所や景色、実際に坂出の町で新たに発見したものなど、坂出をさらに知りたい、行ってみたいという気持ちが高まった。

(4) プロジェクトから学んだこと

私たちは今回のプロジェクト活動から、SNS を主体にしてイベントを行う難しさを痛感した。まず広報についてだが、私たちはチラシと SNS で告知する 2 つの方法で行った。しかし、イベント開催日時が過ぎていてもチラシを配り切れていなかったこと、学校の写真部や坂出市役所、坂出市内の高校のような地域の関係者に協力を仰ぐのが遅かったなど、私たちの広報の不十分さが目立った。その結果、思うように写真が集まらず、開催期間を当初の予定より 1 か月延長することとなった。そして、計画していた予定を大幅に変更したため、後に計画していたスケジュールに大きな影響がでた。これらを通して、誰を対象にイベントを開催し広報を行うのかを明確にする必要があること、スケジュールが変更になった際は臨機応変に対応する必要があることを学ぶことができた。そして、坂出市と本プロジェクトの関わりが薄れてきていることを改めて考える必要があることがわかった。過去には商店街や地域団体との活動を行っていたようだが、新型コロナウイルスの影響により、今では Hashicafe の営業が主な活動である。ゆえに、坂出駅と Hashicafe を往復するのみとなり、Hashicafe に来店されたお客様との交流が多くなる、すなわち、受け身な活動になってきている。それにより、地域の関係者へ協力を仰ぐことに難しさを感じたため、広報が遅れたと考えられる。また、今回は新型コロナウイルスの影響を考え、非接触型イベントとして Instagram を用いてフォトコンテストを開催したが、SNS を活用する難しさを感じた。私たちは普段から Facebook、Twitter、Instagram の 3 つの SNS を情報発信のツールとして活用しているが、投稿内容が類似しておりワンパターン化してきている。今回のイベントで、再度本プロジェクトの SNS 活動の不足を認識したとともに、注目を集める投稿の研究、投稿頻度など SNS との向き合い方をこれからの課題にしたい。また、フォトコンテストの応募作品により、坂出市の人気のある場所や、地元の方々が魅力を感じている場所を知ることができた。これからの活動に役立てていくことに加え、地域の方だけでなくそれ以外の方にも広めることで地域活性化につなげたい。

以上のことを踏まえ、今後の展望として、新型コロナウイルスによる制限が緩和されてきたいま、地域の関係者と本プロジェクトの交流を再度深めたいと考えている。そうすることで、プロジェクトの活動基盤を万全にし、継続的な運営を目指すことができると考えられる。次年度では、受動的な活動ではなく、自主性、積極性の重要性をプロジェクト所属メンバー全員が認識し能動的に活動していくことに加え、坂出市や地域団体との連携を目標として掲げる。

(5) 実施メンバー

代表	川渕 瑞葵	(経済学部・2年)
	市名 彩乃	(経済学部・3年)
	加藤 渚	(経済学部・3年)
	蛭子 伸	(経済学部・3年)
	朝長 知夏	(経済学部・3年)
	井上 俊助	(経済学部・3年)
	中道 祐紀	(経済学部・3年)
	大西 茉彩	(経済学部・2年)
	坂本 華美	(創造工学部・2年)
	奥田 茂人	(経済学部・1年)
	金田 小万智	(経済学部・1年)
	佐々木 向日葵	(教育学部・1年)
	中道 葉菜	(経済学部・1年)
	難波 香好	(経済学部・1年)